

山西省南部地区の戦い

福岡県 中野義勝

私は大正七（一九一八）年五月十六日、福岡県山門郡瀬高町大字上の庄十四―三番地の中野末次の二男三女の次男として生まれました。家業は米・麦が主の農業で、野菜（高菜）も作っていました。田畑の広さは一町五反有りました。学校は瀬高町立の下の庄尋常高等小学校高等科を卒業し、二十歳になるまで家業の農業を手伝っておりました。二十歳で大牟田市にある三井化学染料工業所に就職しました。この会社は「ジグソー」という防虫剤を製造して、軍服の生地防虫加工してい

ました。

昭和十三（一九三八）年春の徴兵検査では第二乙種で、時局柄ちよつと恥ずかしい思いをしましたが、召集令状がいつきても良いように、心身の準備に怠りなく会社で働いておりました。

昭和十三年から十四年にかけては日中戦争がますます戦線が拡大し、中支、南支にかけて都市の攻略戦が激化し、いつ令状が来るか心が躍る日々でした。

昭和十四年五月七日、令状が遂にまいり、日本男子の面目これに過ぎぬ喜びでした。一週間後の入隊を控え、親兄弟との別れと近所の皆様への挨拶回りに多忙の一週間でしたが、五月十四日、めでたく久留米の第十二師団歩兵第四十八連隊の第

五中隊に入隊しました。

第五中隊には新兵三十人が入隊しました。中隊長は同県の八女郡出身の上野文太尉でした。隊長は下士候上りという珍しい経歴の持ち主でしたから兵隊の気持ち分かる人でした。

当時は次から次へと新兵さんが入隊してくるので一週前に入った兵隊が先輩面して私らにビンタをするのには腹が立ちました。一日でも早い者が先任者である軍隊の「しきたり」ですので、仕方なく我慢するほかありませんでした。

入隊の翌日から一期の検閲を目指して猛烈な訓練と厳しい内務班の生活が始まりました。教育助手の兵長と上等兵が遠慮なく初年兵を学科と教練でしごき上げます。教練の後に控えるのは内務班の生活です。手ぐすね引いて待ち構える古年兵の前に、初年兵は哀れな存在で、殴られ放題の毎日でした。日本軍が強いのは訓練と内務の厳しさに在りと本に書いてありましたが全くその通りでありました。

私は歩兵であります。三八式小銃班ではなく軽機関銃班に配属されたので十一年式軽機関銃を渡されました。後で九六式になり、これは優秀な兵器でした。十一年式は三八式小銃に比べると重くて難儀しました。射撃演習でも、よく故障（突っ込み）して弾が出ず苦労しました。

昭和十四年五月十一日に満蒙国境でノモンハン事件が起り、日中以外に日ソでも戦争が始まり、戦争はますます急を告げるとは、このようなことを言うのでしょうか。

昭和十四年八月末に、ようやく一期検閲が終了し、半人前の兵隊の誕生です。肩の星も二個になり、私らの後から入った兵隊に幅をきかすようになり、北支方面に行けらうと噂が流れました。

新しく第三十七師団（冬）が出来て、その下に歩兵第二百二十六連隊が出来、その補充要員として私等が当てられたのでした。外地に出征することになり、準備も訓練でなく実戦用ですので、す

べての点で気合いが入っていました。

久留米から門司港に行き、完全軍装に身を固めて軍用輸送船に乗船した時は、再び祖国日本に生きて帰れるかなと悲壮な気持ちになりました。船は黄海を進み渤海に入り、秦皇島（タークの横の港）に上陸し、汽車輸送で山西省に向け出発しました。時に九月十七日でした。

初めて見る支那大陸の雄大さに目を見はらせながら鉄道輸送に身をゆだねながら石家荘から太原に向う途中、大行山脈の娘子関を通りましたが、天下の嶮といわれただけに、よくぞこんなに凄い所を攻め落したものだ、先輩の第五師団（板垣征四郎師団長）苦戦の戦跡を感慨深く偲びました。列車は太原を西北に見て南下を続け、臨汾を過ぎ、黄河の北にある運城に到着しました。ここに師団司令部が在りました。連隊本部は運城東方の安邑^{アインホウ}という街で、私等の第十中隊は中条山脈の部落の民家を改造した兵舎でした。中隊の広場には三十人ほどの支那兵が杭に縛られていましたので

昭和十四年十月一日から、私の連隊の所属する第一軍の「山西省掃討作戦」が始まり、潞安周辺の中国軍掃討が約九カ月間の長期にわたり開始されました。

私は四〇度の発熱が一週間おきに続くので診断を受けたら「回帰熱」と分かり早速、師団司令部の在る運城の陸軍病院に入院させられ、一カ月間後に治癒退院となりました。原因は「シラミかダニ」に刺されるとこの病気になるそうです。

昭和十五年五月十七日から五日間の「聞喜河底」付近の戦闘は安邑（連隊本部がある）の近くで激戦となり、同年兵四人戦死、十五人が負傷する損害も受けました。昭和十六年一月末には山西省の南端にある夏県付近の戦闘にも参加しました。この時に上等兵に進級しました。三月中は第一軍の山西省東部及び南部の中国軍撃滅作戦に従軍しました。

この頃から軽機関銃が悪名高い十一年式から九六式の新しい軽機に換わり、その優秀さに目をみ

びつくりしました。古年兵が「お前ら新兵の訓練用だ」と言っておりました。古年兵は新兵が来たのが嬉しいのか、いろいろと新兵の面倒を見てくれたので安心しました。着いてすぐ中条山脈一帯の討伐、掃討の任務に就きました。

相手は山西省の親分といわれる閻錫山の軍隊と共産八路軍の両方でした。閻錫山は蒋介石と意見が合わず山西モンロー主義を唱え、中央軍とは相容れぬものがあつたそうです。要注意は毛沢東の率いる共産八路軍で、農民を味方にし、なかなか手強い相手だと古年兵からよく言い聞かされました。

八路軍の新兵は山岳戦に強くなるように両足に砂袋をくくりつけて、急な山を登る訓練をさせられるものだから、実に山登りが得意で、山岳戦になると、さすがの日本軍も散々痛めつけられるのだと古年兵は教えてくれました。中条山脈は中隊のすぐそばに迫っており、そこが中共軍の巣になっているそうです。

はりました。重さも軽くなり、軽機兵としては有り難く思いました。

部隊の位置は黄河の北方に在り、中共軍の本拠地である延安は黄河を挟んで西方に在り、中共軍の侵入を常時警戒しなければなりませんので大変でした。

昭和十六年十月二十日、内地の都城にある歩兵第二十三連隊補充隊に転属が発表され、凱旋できることになり、これ以上の喜びはありませんでした。十月二十六日安邑を出発、二年前内地から来た路を逆に進んで「ターク」港で輸送船に乗船、一路黄海を経て門司港に上陸しました。

翌二十七日、都城の歩兵第二十三連隊第八中隊に編入されました。十一月二日「善行賞」が付与されました。十一月三日召集解除、除隊、懐かしの我が家へ帰郷、一家を挙げて無事帰国を祝ってもらいました。

当時の日本は、日米交渉が破裂寸前で戦争必至の状況にあり、今度はアメリカ相手に南方に召集

されることを覚悟せねばなりませんでした。

帰国後すぐに入隊前まで勤めていた職場である三井化学染料工業所に勤めることになりました。

この会社は留守宅に手当金を毎月届けてくれておったことが父の記録でわかり、本当に有難く、早速お礼申し上げます。大東亜戦争が始まり、いつでも応召できるような心の準備をしておりましたが、会社が軍の指定工場なので従業員の召集は免除されたのか、とうとう令状は来ませんでした。

昭和十九年、結婚して三男二女をもうけました。

昭和四十八年五十五歳の定年まで、同じ会社に勤務でき、本当に幸せなことに感謝しております。年月日は忘れましたが「支那事変従軍記章」が届けられました。

定年後、農業に専念し、瀬高町農協の理事、監事をそれぞれ三期ずつ勤め、町の農政に貢献しましたつもりです。

私は一年前に「頸椎」の手術をしたのち脚が不自由になり、家に居ることが多くなりましたが、

今後世のためになる事をやっていくことが、戦野に散った戦友の供養になると思っております。